
ワンフォアオール・オールフォアワン

ポルナ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

ワンフォアオール・オールフォアワン

【Nコード】

N4878I

【作者名】

ポルナ

【あらすじ】

『ワンフォアオール・オールフォアワン』。これは、ラグーマンなら誰でも知ってる言葉です。

ある高校生「篠原 悠」の、ラグビーと恋を通して成長する姿をえがきます。

第一章 「始まり」

1：今日から高校生

「ジリリリリリリリリ！」

「ふわ〜あ……………」

「リリリリリ…ガチャ」

朝か……

あつ、僕は今日から高校生になります、「篠原しのはら 悠はるか」です。

女みたいな名前だなんて言わないで。
れっきとした男です。

「うっ、寒い…」

春になり、暖かくなったとはいえまだ朝はけっこう冷えている。

しかもかなりの寝相のわるさにより、掛け布団は遠くにいらしてしまっていた。

「よいしょっ…と」

掛け布団にくるまり、体を温める。うん、あつたかい。

気温が低いからこそ、この温かさを感じる。
だから僕は寒いのは嫌いではなかった。

「あつ、そろそろ起きないと」

時刻は5時10分。

いつもならもう起きている時間だ。

「よし、もう体もあったまったらし、起きよう」

支度をして部屋を出るのは、5時半頃になってしまった。

「あ、兄さん、おはようございます。」

台所につくと妹の優が朝食の準備をしていた。

「おはよう優。おそくなってごめん、すぐてっだうから」

僕と優の父さんは大工で、今県外に家を作りに行っているからいいし、母さんは去年突然の病気で死んでしまった。

だから今は兄妹2人で暮らしている。

それにも慣れてきたかな。もともとから家事の手伝いをするのは嫌いじゃ無かったし。

「「いただきまーす」」

もぐもぐ…

「うん、やっぱり朝はご飯に味噌汁。これ以外にないね。」

「そうですね。…あつ、でもパンをくわえながら『ちこく、ちこく』っていうシチュエーションが……」

「あつ、それはありだ。」

「なんか定番化してますものね」

うんうん……って、何の話をしてるんだ僕は。

「それにしても兄さんが炊いたご飯、とってもおいしいです。」

優はにつこりしながら言う。

「父さんが仕事で行ってる新潟県から送られてきたコシヒカリだからでしょ。味の格が違うよ。」

「でも兄さんの料理はいつもおいしいです。さすが元調理部です」

「調理部っていつてもいつつもケーキとかタルトとか、お菓子ばかり作ってたんだよ？料理は優のほうが上手いさ。」

「え、そんなこと……」

優の顔が赤くなる。

「あるある。どんどんおいしくなってるもん。自信持ってるっていいと思
うよ」

「あ、ありがとうございます……」

高校は電車で行かなければならない距離なので、優より早く家を出ることになる。

まあ優はしっかり者だから心配してないけど……

「チーン……」

仏壇へのお参りを済ませ、玄関に出る。

「あ、ちょっと急がないとかな……」

合格祝いにかつてもらった腕時計を見ると、そんな時間だった。

駅につくと、見なれた男女の顔を見かける。

「よっ、はる。おはよ

「おはようハルカ。」

「おはよう。ごめんねおそくなって

少し息を切らしながら言う。

僕のことを『はる』と呼んだ男の子のほうは『滝沢 宏一』で、僕はコウと呼んでいる。

そして僕を名前で呼ぶ女の子のほうは『池田 香織』。

2人とも小学校の時からずっと一緒のクラスだ。

「はるがギリギリにくるなんてめずらしいな」

「優ちゃんといちゃいちゃしておそくなったのね？」

「ええ！？何でそうなるの!?!？」

香織のいきなり爆弾発言にびっくりする。

「慌てるってことは凶星なのか……」

「いやいやいや！そこで納得しないでよ！？だから何で急に（実に一言目に）そういう話になるのが……」

「だってハルカ、今まで『恋』したこと無いんでしょ？」

「うん、ないけど……」

まだ頭の中を『？』にしながら答える。

「やっぱり高校生にもなってそれはありえないな……」

コウが腕を組みながら頷き、納得したように言う。

「でしょ！？だからハルカはシスコンであるとしたか思えない！！」

「ええ〜！？そんなことないよ！」

「だってこの年になってあんなに仲がいい兄妹、めったにいないぜ。ああ〜うらやましい」

「この前ハルカの家で晩御飯呼ばれにいった日、2人が料理するときの楽しそうなことといったら……」

「もう夫婦レベルだったな」

「ああ〜もう！2人ともからかわないでよ〜！」
顔が真っ赤になってるのが自分でもわかる。

…2人にかかわれるのはよくあることなんだけどな。

「ガタンゴトン……」

「あ、電車来たぞ」

「それにしても、はるはともかく、よく香織も合格したよな。」

「三年になってからめっちゃ頑張ったんだって。2人と一緒の学校
行きたかったからね。」

僕らが今日から通う高校はここらへんじゃ一番レベルの高い進学校
だ。

香織は成績はあまり良くない方だったが、
確かに3年の秋の模試ではB判定までになっていた。

「宏一はいいわよね、バカのクセに推薦ではいれて」

「バ、バカとはなんだ!……否定はしないけど」

この学校は陸上部が強く、特別推薦枠が設けてあった。

中学の時、全国大会の100メートルで二位までいったコウは、それで入学できたわけだ。

悪いがそうでもなければ中学の時成績ダントツでビリのやつが入れるわけがない。

「……でもこれからは宿題とかもいっぱい出て、嫌でも勉強しなきゃだよ。」

「うげっ……」

僕がそういうと、コウはかなり嫌そうな顔をした。

「しかもこの学校のモットーは『文武両道』だから、部活の先生も勉強には厳しいよ、きつと」

「うげげっ……そんなあ……」

まあ部活だけでやっていけるほど、高校生活は甘くないってことですね。

「ガヤガヤ……」

学校に到着すると、多くの新入生が玄関にはられた大きな張り紙を見ていた。

「あつ、あれって、クラス分けじゃない？」

「ああ、そうかもな。……人が多くて大変そうだから、俺が代表して見てきてやるよ。」

「よろしく、コウ。」

「おう、まかせとけ」

コウはすぐに人ごみの中に消えてしまった。

「また3人同じクラスになれるといいわね、」

「そうだね。」

「あつ、戻ってきた。」

「宏一、どうだった？……って、なんか元気ないわね」
「確かに行く前よりかなりテンションが低い。」

「……お前らは同じで2組だったよ？でも、なぜか俺だけ7組なんだ〜！！」

「本当？やった、ハルカと一緒にだ」

「なんかコウのこと完全にスルーしちゃってるよこの人！？」

「ガガーン……」

「ほら落ち込んだ。」

「小学校から同じクラスにならなかったことがないから、かなりショツクなんだ。」

「またよろしくね、ハルカ」

「いや、それ以上無視するとさすがにかわいそう……」

「ずずーん……」

「……」

「ほら、なんかこのまま地面にめり込んでいきそうな勢いで沈んでるよ」

「……わかった、わかったわよ。ごめんね、宏一。昼休みにでも遊

びに行つてあげるから……ね?」

「なんか今日俺……ついてない……」

結局コウはテンションが上がらないままトボトボと教室に入つていったのでした。

「やり過ぎたかな……」

「……やり過ぎたね。」

……ちなみに、コウだけ7組に行ったのは、担任が陸上部の顧問で、特別推薦で入った人を集めたというのが理由……
というのあとでわかったことだった。

第一章 「始まり」

1：今日から高校生（後書き）

まだ「ラグビー」という単語さえも出てきませんでした……あとヒロインも。（香織はヒロインじゃないことが確定）

一週間に一回は必ず更新して行きたいと思います。どうぞよろしく
お願いします。

2：新しい教室

「ガヤガヤ」

教室に入ると、だいたいの人は席について新しい友達に話しかけ、あとは中学校が一緒の友達と話している人がいた。

「うわっ、なんか雰囲気全然違うわね……」

「うん、中学校よりもかなり落ち着いた感じだね。」

「よし、『友達できるかな』っていう不安をさっさと解消するためにも、まずは明るい挨拶からいくわよ」

香織は「それじゃ」といって自分の席に行ってしまった。

僕も緊張してるけど、みんな『友達作りたい』って思っているはずだ。

「よし、僕も挨拶から……」

座席表を確認し、自分の席に行く。

……すると、僕の席の周りはまだ来てない人が多く、隣りに勉強している女の子がいるだけだった。

「……隣りなわけだから、喋れないとまずいよな」

そう思つて勇気を出す。

「お、おはよう！」

「……………」

あ、あれ？

反応がない。

なんかちょっとビクッと動いたように見えたけど……

自分が言われたと思わなかったのかな？

「……………」

沈黙が続く。

どうしよう、もう一回言おうか。

「……………」でも、これ以上言つてさらに反応がなかったら周りに変に思われてしまう……………」

まず無理やり口を聞かせるのは止めることにして、黙つて席についた。

授業中にでもさり気なく質問とかする形で話しかけて、会話できるくらいになつておけばいいか。

「ふう……」

せっかく勇気を出したのにうまく行かなくてちょっとへこんだ僕でした。

「キーンコーンカーンコーン……」

チャイムがなると、みんな席についた。

そろそろ担任の先生が来るかな？

(～十分後～)

「ごめいわ……」

あれ？来ないな。

おかしいな。隣のクラスからは先生の声が聞こえる。

うちのクラスにももう来てもいいはずだ。何かあったのかな。

もう少し待つか。

(さらに十分後)

「 ガヤガヤ…… 」

…… 来ない。 やっぱり何かあったのかもしれない。

もうみんな席を立ってしまっている。

「 ねえハルカ、 もうすぐ入学式の時間よね。 」

「 え？…… あ、 ほんとだ。 他のクラスはもう移動し始めてる。 」

「 ちばいわよね、 それ 」

「 うん、 ちばいね 」

「 ゼジするぞっ 」

「 ゼジするぞっ…… 」

「 えー、 新入生の皆さん、 入学誠におめでとうございます。 皆さん

んは……………」

……結局先生は来ず、僕たち二組は自分たちで体育館に移動し、今に至る。」

入学式と違って色々な人の話が長くて退屈だな。

……うん、寝よう。……………ぐう。

(いつでもどこでもすぐに寝れる人)

「ごめ　ーーん!!」
ビクッ!!

入学式が終わり、教室で待機していると隣りのクラスから女の人の大きな声が聞こえた。

「遅れちゃった　。　いやー、いきなり自転車パンクするんだもん、困った困った　」

……？まさか。

「えっ？ここは三組だって？……………あっ!!」

……やっぱり。

「間違え……」

ドダダダダダダダ……ガラッ！！（二組教室に入ってくる）

「たー！！」

ビクビクッ！！

スタスタと歩いて女の先生が教壇に立つ。

「えー、…コホン。もっかい言い訳するのは面倒なので、…、以下略！！」

え、ええー……

なんていい加減な。

「という事で、今日は授業は無いので、終わり！！……あ、この無駄に大量に出てる連絡プリント、ルーム長配っついてね」

しかも略しすぎー！！

「じゃー！！私は眠いので、帰りますー！！」

ガラッ……

いやほんとに帰った！？

……と思つたら、廊下から男の人の声がした。

「あつ！桃本先生！また遅刻しましたね！？」

「げつ、教頭……………せ、先生。」

「今日という今日は許しませんよ！入学式という大事な日に！」

「いやいやいや！今日はちゃんと理由があるんだよ！……………ですよ」

クラスのみんなは扉側に行つて様子を見ている。

他のクラスの生徒も顔を出している。

……………あつ、先生が来て教室に戻された。

「自転車が突然パンクしたんですよ！それでもうめっちゃ頑張つてそのままこいだんですけど……………」

「もともと間に合う時間に起きてないから、さらに遅刻したと。」

「そうそう。また目覚ましを裏拳でぶつ壊しちゃってさ……………」

……………つてしまった！？」

「やっぱり寝坊したんじゃないですか！！」

「いやいや！私は悪くないんだ！この手が悪い！」

「あーもう、校長先生に頼んでクビにしてもらつしか……………」

「ええ！？どうかそれだけは……………」

ガラッ

あっ、戻って来た。

「……これ以上ちゃんとやらないとホントにクビにすると言われたのでちゃんとやります。あの教頭うざいな もー」

シーン……

「はい、今日から二組の担任やります、『桃本久美（もももと くみ）』です。まーよろしくね？」

シーン……

「何静まり返っちゃってるのよ？…あー、『あんたホントに先生なの？』とか思ってるわね？」

はい、思ってます。

「大丈夫、授業はちゃんとやってるから。あ、ちなみに教科は英語ね？」

なんか（いろんな意味で）すごい先生にあたったやつたな……

「じゃ、名簿1番の君！ルーム長けってい！」

ホントに大丈夫かこの先生……？

僕はこの先が不安になった。

2：新しい教室（後書き）

今回はコメディ要素がはいりました。

基本的にはシリアスな話にしようと思っているのですが…

3：仮入部、そして

「ぜひわが野球部に！」

…おはようございます。

悠です。

「続いてバレー部の紹介を」

今日は一限を使って部活動紹介をしています。

…先輩方は新入部員をたくさん集めるべく、気合いの入った実演と紹介をしている。

「ねえハルカ、もう入る部活決めた？」

「おれは陸上部に決まってるぞ」

「あんたには聞いてない」

「ガーン！」

いやコウは陸上推薦なんだから陸上部に入んなかったら裏切りですよ。

「で、ハルカ。どうなの？やっぱり調理部？」

「いや、それ以外の部活に入ろうと思ってる。まだ決まってないけ

どね。」

「じゃあはる！陸上部に入ろうぜ！」

「ハルカ、文芸部なんていいんじゃない？手先器用なんだからいかせるよ、きつと」

「そうだね、面白そうだ」

「ガガーン！（無視された…）」

僕は運動神経がとてつもなく悪い。それに鈍足だ。

だからコウには悪いけど、運動部には入るつもりはないし、陸上部なんてもってのほかだ。

「　　最後は、ラグビー部の紹介です。よろしくお願いします。」

「おっ、これで最後か」

「この学校のラグビー部は、部員が少なくて困ってるらしいよ」

「そうなんだ……」

だからといって入る気はないけど。
だって怖そうだし…

「これから、ラグビー部の紹介を始めます。ラグビー部は」

……放課後。

今日から仮入部の期間だ。

僕は一人で見学をして周りながら入る部活を決めようと思い、香織とコウと別れていた。

「まずどこからいこうかな……」

部活動紹介の時を思い出す。

……ちなみに、最後のラグビー部の紹介は結構印象に残った。

ラグビーというならば、怖そうな大男が大勢いるのかと思っていたが……

「高校のラグビーは、どんな人でもできます！体の小さい人でも低く姿勢をとったり、人数をかければ大きな相手も倒せます！」

「体の大きさよりも、運動能力よりも、ラグビーで求められるものは、仲間を思う気持ちです！」

「仲間を助けるための必死なタックルや、ボールへの執着心は、周りに感動を与えます！」

「心と体を鍛えたいなら、ラグビーしかありません！」

……意外と紹介に出てきたラグビー部員は、大男というより、むしろ細めの体型の人が多かった。

そして、実演の方は、「タッチフット」というものをやっていた。

タックルのかわりに相手をタッチすることでディフェンスするというゲームだそうだ。

ボールを持ったほうは多彩なパスやステップを使い、相手を抜こうとし、

ディフェンス側はラインを作って相手を捕まえようとしていた。どちら側も声を出し合ってコミュニケーションをとり、仲間をサポートしていた。

また、時々、攻撃側のサインプレーが決まり、綺麗にディフェンスラインを切っていったときには、「おお〜」と歓声が上がった。

……抜けた時はさぞ気持ちいいんだろうなあ。

僕はラグビーはやりたくはなかったが、この「タッチフット」という遊びは少しやってみたくなった。

「……ラグビーのことはいいとして。さて、どこから回るのかな。」

部活動紹介の紙をみる。

「……………よし、文芸部から行ってみよう。」

僕は紙を見ながら文芸部の部室を目指した。

「ふう。今日はこんなものかな。」

文芸部 美術部 書道部 調理部というふうに回ってきたが、以外にも時間がかかって、もう帰らなければいけない時間になっていた。

「なんだか疲れた……」

どの部活でも部室をちょっと覗いただけで（半強制的に）招かれ、長々と勧誘された。

実績も結構あるみたいだし、活動内容も面白そうだったが、残念なことにどの部活も男子部員が少なすぎた。

調理部なんて女子率100%だ。

僕は香織以外の女の子とあまりしゃべったことがないので、そんな部活に入ろうとは思えなかった。

「残念だったな……」

また明日別の部活を見て回るか。

それでもいい部活が見つからなかったら誰かクラスの男子を誘ってどこかの文化部に入るか、

それでもだめだったら有一得意な水泳に入るか………だな。

「よし、帰ろう」

帰る支度を終えて教室を出る。

すると、反対側の教室からグラウンドが見え、まだ活動している運動部を見つけた。

「こんな終了時間ぎりぎりまでやっているのか……」

どこの部活だろう。

……窓の近くに行ってみてみると、すぐにわかった。

「ラグビー部か……」

「「オンサーイド……」」

大きな声とともにボールが空高く蹴り上げられる。

試合形式の練習をやっているのかな。

「ハイっただあ！」

ボールを取った人にきれいなタックルが決まる。

ボールは手から転がり、素早くそれにタックルした側のチームの人が拾った。

「鈴木！右だ！放れ！」

「パシッ」

すごいスピードで走りこんできた人にパスがされる。

すると、うまい具合にディフェンスの間を抜けて、そのまま走り抜けた。

「ピーーーーー！！トライ！」

どうやらトライ（相手のゴールラインの奥にあるインゴールにボールをつけること＝五点）が決まったようだ。

「ナイストライ！新井さん！」

トライを取った人が声をかけられる。

なんかかなり小さい人だなけど……

三年生なのだろうか。

「ありがとな！ナイスパスだ」

……朝の「タッチフット」をやっている時とはまるで迫力が違った。

一つのボールをめぐる激しい攻防に、圧倒された。

「……………」。
「……」
やっぱり僕にはあんなこと、できそうにないな。

そう思いながらも、僕は練習が終わるまで飽きることなく見ていたのだった。

4：不思議な人

「おっ、一年生だな。」

僕は帰ろうと下駄箱でくつを履き替えていると、誰かに話しかけられた。

くつのラインを見ると緑。ということは三年生か。

「あ、はい」

見上げれば、ジャージにクウォーターのパンツ、そしてソックスをはいた小柄なひとが立っていた。

ラグビー部の人かな？

全身が土で汚れている。

「そうですが、何か……」

立ち上がって見ると、本当に小柄な人で、身長は僕よりも低いようだった。

「いや、こんな時間までいたから、ちょっと気になったただけなんだ。……一人のようだけど、今まで勉強でもしてたのか？」

「あ、いえ、いろんな部活の仮入部にいっていたので……」

今はラグビー部は一人でも多くの部員を欲しがっている状態だ。

僕がラグビーの練習を見ていたなんて言ったら、かなり誘われてしまうと思ったのでそう答えた。

「?……いやまてよ、仮入部は授業終了から一時間までと決まっていたはず……」

……そうだった。

なんとかごまかしたいところだったが、ここまでくれば正直に答えるしかない。

「あの…それが終わってからは、その……ラグビー部の練習を……」

言ってる途中、とたんにラグビー部の先輩の顔が明るくなる。

「みてたのか!」

「……はい」

う、やばいかもしれない。

「そうか、窓から一人だけ、誰か見ていると思ったのはおまえだったのか」

「はい、そうでした。……そ、それでは失礼し」

……ガシッと。

そこで逃げようとしたのだが肩を捕まえられた。

た、助けて。

「それで、どうだ！？ラグビーに興味を持たなかったか！？」
肩をガクガクとゆらされる。

「は、はい、す、少しは……」

「ホントか！？……あ、ごめんな、」

僕がちよつとぐったりしてるのを見て先輩は解放してくれた。

……からと言ってもう逃げられるわけではないが。

「…あのさ、明日仮入部に来てくれないか？」

…う。いきなりその話できたか。

「そ、それはちよつと……」

仮入部に行って顔を覚えられたらまたつかまる可能性がある。

だから、ここはうまく断らないと……

「あの、まだ仮入部に行きたい部が残っているので、すみませんが
……」

「いや、明日だけでいいんだ！まだ期間はあるだろうっ。」

「あ、はい」

「……君はあれだけ長い間練習を見ていられた。……てことは、少しでもラグビーの魅力を理解してると思うんだ」

「は、はあ……」

「部紹介の時にやったタッチフット。あれをやってみたいと思わな
いか？」

確かにあれは楽しそうだった。

……入るかどうかは別として。

「まあ、少しは……」

「じゃあたのむ！本当に明日だけでいいから！」
先輩は手を合わせて頼んできた。

……うーん、明日だけと言うならいつでもいいかもしれない。

それにここまでたのまれれば断ることなんてできない。

「……分かりました。明日お伺いします。」

「本当か！？ありがとう！」

先輩は本当に嬉しそうな顔をした。

「いやー、仮入部に来る一年生がかなりすくなくて困ってたんだよ。」

「そうですか…。」

「でも来てくれた人は楽しんでたみたいだったな。明日も来てくれればいいが…。」

……僕は先輩が満足そうに言ったその言葉を聞いてほんの少し明日が楽しみになったのだった。

…

「……まだ電車まで時間がありますね」

「ああ、ちよっと早く駅につきすぎたかな。」

「そうですね。」

……あれから僕は先輩と駅に向かいながら、ラグビーの事についていろいろ教えてもらっていた。

簡単なルールや、練習内容、そして先輩がなぜそんなにラグビーが好きか。

……ん？先輩……？

「あ、あの……先輩のお名前は……」

「あつ！悪い、まだ言ってなかったな……おれは『新井あらい 竜太りゅうた』。明日はよろしくな。」

「はい、…僕は篠原悠です。」

「はるかか……女みたいだな」

「よ、よく言われます……」

「あ、わるいわるい。でもいい名前だとおもっぞ。おまえにピットリだ」

「そうですね？」

「『はるか』という字は『悠々』の『悠』だろっ？」

「あっ。どうしてわかったんですか？」

「いや、なんとなくだよ。…なんかおまえは世間のわずらわしさから離れて、一部の人間と心静かに暮らしてそんな感じがするからな。」

「えっ。……そうかな？」

「込み入っていて面倒な人間関係は特に嫌いだろう？」

「あ、……はい。」

「まさに『悠々自適』じゃないか。」

……。

……沈黙がながれる。

「ラグビーはな、さっきも言ったけど一番仲間を大切にするスポーツだ。……だからひとりか足がものすごく遅かったって、誰もそれを責めないし、そいつを見捨てない。」

「……………」
「ラグビーにはプレーの種類が多い。きっと誰にだって輝けるところはあるんだ。だから周りはそいつのその部分を引き出してやる。」

……………いじめや偏見は絶対はないということ…か。

「……………話しててわかったんだよ。なんかお前は信頼関係が築けた相手にしか、人一倍本当の自分をだせない性格だということ…」

「……………」

自分では自覚してなかったけど、よく考えればそうかもしれない。

付き合いが長いあの2人としかほとんど接していない。他とは話すことがあったとしても、ほんの少しだ。

彼らのことは確かに信頼している。今まで助けあってきた仲間だから…

「あ、わるいな。なんか分かったようなことばっかりいつちやって新井さんはすまなそうに頭をかいた。」

「いえ、実際そうだと思います。今まで考えたことなかったですけど……………」

……………なんか見透かされているようで不思議な気分だった。

『プオーーー』

右側の遠くから光がみえはじめた。

「おっと、電車がきたな。」

「あ、はい。……でも反対の号線だから急いだ方が……」

「やべっ、この電車は二番線だった！じゃ、悠。また明日な。」

「あ、はい。さようなら」

新井さんは急いで階段をおりていった。

……初対面の人とあんなに話せたのは初めてだった。

いつもはすぐに僕のほうからさけるのに。何故か新井さんとは話していて安心できる暖かみがあった。

ホントになぜなんだろう。

…新井さんの乗った電車がどんどん遠ざかっていく。

僕はその方向を見ながら、ひとりただ首をかしげていた。

4：不思議な人（後書き）

シリアスな感じになりました。

てゆうか、1話がこんなに長くなるとは思わなかった……（無計画）

いやまだ終わってないですけど…

タイトルこんなのにしなきゃよかったと後悔してます。

5：僕の妹

僕が家につく頃にはすっかり暗くなってしまっていた。

「ただいま」

「あつ、お帰りなさい兄さん」

台所から優が顔をだす。

…あれ？何で自分の部屋にいないんだろ？

「すぐ食べますよね？今ごはん温めますから……」

「うん、ありがとう」

台所に入り、食卓を見ると、2人分の夕ご飯。

……こんな時間まで食べるのをまっていたのか。

「優、」

「はい？」

「僕が遅いときは先に食べてていいんだよ？」

まさか食べてないとは思ってなかったのだから、僕は連絡しなかったことを後悔していた。

「……いえ、一人で食べるのは寂しいので……」
優は小さな声でそう言ったのを聞き、僕は申し訳なさをいっばいになった。

「そつか……ごめんね、これからおそくなると思うんですけど……」

「それでも大丈夫です。兄さんは高校生だからしょうがないですよ。」

優は笑っているつもりなのだろうが、その表情から寂しさの色は消えていなかった。

「ホントにごめんね。できる限り早く帰ってくるようにするよ。」

「はい……」

今までずっと朝食も夕食も一緒に作り一緒に食べていたので、優は今日になっていきなり一人で食べることはできなかったのだろう。

うーん、僕が優でも待ってるよな。ホントになんとか早く帰ってきてたいところだ。

『チーン』

電子レンジの音がひびく。

「さ、食べよっか」

「あ、はい」

温めたお皿を食卓に並べる。うん、いいにおいだ。

「……………あ」

…すでに全て完成された料理の数々を見て、あることに気づいた。

「どうしました？兄さん」

優が不思議そうにたずねてくる。

「あのさ、これから僕がおそくなる時はいつも優に夕食全部作ってもらうことになっちゃうね……………」

……………僕がすまなそうにそう言つと、優は「何をいまさら」といったようにわらった。

「気にしないでください。私料理するの好きなので……………兄さんは毎日楽しみして帰ってきてくださいね。」

…本当に申し訳ない気持ちでいっぱいだった。

「ありがとう、優。ごめんね、本当に……………」

「そんな顔しないでください。……………私が料理が好きなのは、食べる人が『おいしい』って笑ってくれるのが嬉しいからですよ?。」

…：僕そんなに暗い顔してたかな。

「そうだよね、こんなにおいしそうな料理を目の前にしてこんな顔をしてるのは失礼だよね。」

僕の顔から暗さが消えたのが分かったのか、優はにこっと笑った。

「はい、じゃあいっぱい食べてくださいね。」

「うん、…いただきます」

「いただきます」

…

「「「ごちそうさまでした」「」

「あー、おいしかった」

「ホントですか？はじめて一人で全部作った夕食だけど、満足してくれたみたいで嬉しいです。」

優は自分も満足げに言った。

「炒めものもコロツケも、油っぽくなくてそれでいて旨みがあつて、ホントにおいしかったよ」

「良かったです」

優はごきげんな様子で片付けをはじめた。

……あ、全部作ってもらったんだから片付けは僕がやらなきゃ。

「優、」

皿を流しに運ぼうとしているところを引き止める。

「その……夕飯全部つくってもらっちゃったからさ、洗い物は全部僕がやるよ。」

「えっ！そんなのわるいです！」優はとたんにあわてる。

作る方が大変だし時間かかるから、そんなの当たり前だと思っただ

けどな……

「遠慮しないで、ほら。先にお風呂入ってきなよ」

優から皿を受け取り、その小さな肩をもって体を風呂場の方に向ける。

「あっ……」

ちよっと困ったような顔になったけど、すぐに観念した。

「……じゃあお言葉に甘えます。」

「ゆっくり入っていいからね」

優は「はい」と言って風呂場に向かった。

……そういつても優はいつも先に入るとき僕を待たせるのを気にするのか、すぐにあがってきてくれる。(てしまっ。)

もっとゆっくりしていいのになぁ。…

…

「お先でした」

居間のドアから優が顔を出していった。

「や、もうあがってきたか」

まだ洗い物が終わってから五分とたつてない。

実に10分程度の入浴だ。

…女の子でそれって、かなり短いんじゃないかな……。よくわからないけど。

「僕も今入るよ……って優！まだバスタオルじゃないか。早く着

ないと風邪ひくよ?」「

「すみません……まず、あがったことを伝えようと思って……」

「だからそんなに急ぐ必要ないって。……いいから早く着てきなよ」

「はい」

優は居間のドアを閉めて小走りで行った。

「……………」

……………にしても、びっくりした。

まさかバスタオル1枚で来るなんて。

髪もまだ乾かしてないようだったし、風邪引く要素満載じゃないか。

うーん。今日で改めて思ったけど、優の周りに気を使いすぎるのも困りものだよな。

今度ちゃんと言わないと……………

「よし、僕も入るか」

ソファから立ち上がり、電気を消して居間からでた。

「くしゅんっ！」

その時、優の部屋からかすかにくしゃみの音が聞こえた気がした。

「……………」

……………大丈夫かな、ホントに。

5：僕の妹（後書き）

はるか
の妹、優のはなしでした。

こんな仲のよい兄妹、ホントにいたら微笑ましいですね。

6：初めてのラグビー（前書き）

だいぶあきました。

読んでくださった人は少ないかと思いますが、すみませんでした。

これから頑張ります。

6…初めてのラゲビー

「じゃあ次いくぞー。』」しているのを感じる』というのは動名詞を使って、…」

今は授業中。六限の英語の時間だ。

「…で、この場合は動詞が『heard』だから、……」

担当は担任の桃本先生。最初はいいかげんな人だと思っただが、意外と授業はわかりやすい。

「はいじゃあこの訳を十七番のやつ!」

「……」

……なかなか名前を覚えようとしてくれない所がやっぱりいいかげんだけど。

って僕十七番だった!?

「は、はい!」

慌てながら返事をする。

「えっと…」ケンは叔父が流暢な英語をはなすのを聞いて …」

「キーンコーンカーンコーン……」

授業の終わりを告げるチャイムが鳴る。

「じゃあ今日はここまで。気をつけてかえれよ。最近不審者おおいからな。」

「きりーっ」

「気をつけ」

「礼」

「「ありがとうございます」

「ガヤガヤ…」

放課後になった。

とたんに教室がさわがしくなる。

おしゃべりを始める人。

そうじ当番の仕事をする人。

先生は「いやつと終わった」と言っつて教室を出て行つた。

そして、僕のように運動部の仮入部にいくために体操着に着替える人。

「あれ？はるか着替えなんかしてどうしたの？」

「あ、香織」

近くを通りかかった香織は、僕が運動部へ行くことに驚いたようで、目を丸くしている。

「どうしたも何も、昨日ラグビー部の人に捕まっちゃつて、仮入部にいくことになつちやつたんだ。」

「へえ、まさかとは思つたけど、やつぱりね。

……ホントにはるか断れない性格なんだから。

部員が1年生を見つけて勧誘するのが当たり前なら、興味がなければ断るのも当たり前よ？」

香織はあきれたように言つた。

「でもそこがはるからしいというか……」

「……まあ今日だけだからいいんだ。」

ところで香織はどうするの？」

「わたしは昨日バトミントンいったから、今日はバレーにいくつもり。」

香織はスポーツ全般が得意なので、入る部活は部の雰囲気などで決める気のようにだ。

「そっか、じゃあがんばってね」

「うん、はるかも『明日もこい』って言われてもちゃんと断るんだよ。」

「はいはい」

「じゃ、」

香織は着替えるために更衣室へむかった。

「さてと、じゃあ行くか…。」

グラウンドには、9人の1年生（体操着の人）と、

えつと……1、2、3…

15人のラグビー部の人ですでにきていて、パスなどをしていた。

「お、篠原。来てくれたか」

あ、新井が僕を見つけてこっちにきた。

「こんにちは。今日はよろしくお願いします。」

「おう、こちらこそな。……じゃ、まずパスしてみつか。」

ラグビーボールが差し出される。

「はい。」それをうけとり、初めて持った楕円球の感触を確かめる。

これがラグビーボールか…

「両手でしっかり持って、下投げでまっすぐ放るんだ。…さ、やってみ？」

「あ、はい」

ボールを新井さんにむかって投げしてみる。

『ぱしっ』

「お、うまいじゃないか」

ボールは先がブレはしたものの、案外ねらったところに飛んでいった。

「じゃ、次。キャッチのしかたな。…ちょっと自分の首を軽く締め
るようにして…」

「同じですか？」

「ああ。で、そのまま前にもってくる。」

目の前に出すと、両手は三角形をつくっていた。

「それが、キャッチする時の形だ。『ハンスアップ』って言って、
基本中の基本な。」

「わかりました。」

ほれ、と新井は僕にむかってパスをした。

…すぽっ、とハンスアップした手にボールがちょうどはまった。

「ソーソー」

もう一回投げ返す。

「ラグビーボールってキャッチしにくそうだと思ったけど、意外と
簡単なんですね。」

「ああ。…でもな、いつもとりやすいパスがくるとは限らないぞ。
ほれっ」

さっきはまっすぐだったボールが、今度はぐちゃぐちゃに回転しながら飛んできた。

「うわっ」

それをとらえることができず、おとしてしまった。

「な？だから相手の取りやすいパスをすることが大切なんだ。」

「なるほど。」

「うん。じゃ、あそこでランパスしてる奴らん所はいつてきな。」

「あ、はい」

……僕はある5人組の所にいれてもらった。

1年生は僕をいれて3人になる。

「よし、じゃあゆっくりいくぞー。パスをもらう時は相手より前にでないようになー」

横に並んだ6人の列がそのままゆっくり前に進む。

「はい右」

「はい俺だ」

次は僕のばん。

「篠原、『右』とか、『俺』とか、相手の名前を呼んだりしてボールをもらうんだ」

「あ、はい。…じゃあ、『右』ですっ」

「ほいつ」「…ぱしっ。」

「はい篠原」右からボールがかかり、パスをする。

……っと、走りながらパスするのは難しいな。

「あれ、そういえば篠原って、同じクラスじゃないか？」

「？」

突然となりをはしる1年生に話かけられ、そっちをむくと、確かにクラスで見た顔だった。

名前はわからな……いや、体操着の刺繍でわかる。「藤沢」というらしい。

「そうだね。同じクラスだ」

「篠原、パス上手いな。経験者？」

「え？いや、初めてだよ。新井さんに昨日捕まっちゃって来ることになったんだ。」

「そっか。…でも初めてにしてはすごい上手いと思うよ、篠原」

「そっかな？」

「俺は小5からやってるから分かるよ、」

「でも入部する気はないから上手くても意味ないよ。」

「そうなのか？残念だな……」

それからランパスを何往復かして、休憩にはいった。

「名字はこれで分かるけど名前はまだ言ってなかったな。俺は『藤沢健太』ってゆうんだ。」

「僕は篠原悠。…『はるか』でいいよ。」

「じゃ、俺も『けんた』で。」

うーん。

なんか知り合いが増えるのってあんまり好きじゃないんだよな。

でも同じクラスならいずれそうなるだろうからいつか。

「ラグビーは楽しいよ。はるかも今日で気が変わるかもしれないぜ」
「？」

「楽しいかもしれないけど、僕には無理だよ。運動むいてないんだ。足も遅いしさ。」

ホントに鈍足なんです。

50メートルに8秒かかるくらい。

シャトルランは100回はいくけど、瞬発力系、筋力系の体力テストはほとんど5点いかない。

「そんなの関係ないって。一見無理そうに見えても、誰にでもできるのがラグビーなんだよ」

「でも…」

なんかいつてることが新井さんみたいだな。

僕にもラグビーができるってゆうのは、どうにも信じられないんだ

けど。

だってそんなにぶつかり合うスポーツを非力な僕がやったら、ぶつ飛ばされること間違いなしじゃないか。

「まあ、やりたくないってゆうなら無理には言わないけどな。」

『ピーッ』

とそこで笛がなった。

「よし、じゃあタッチフット始めるぞー。」

新井さんが声をかけ、
部員と一年生たちが集まる。

「部活動紹介の時にやったからだいたい分かると思うが、一応説明するぞー」

ここからはタッチフットの説明です。飛ばしても構いません。

タッチフットとは、タックルの代わりにタッチをすることでディフェンス（以後DF）をするラグビーである。

タッチされたボールキャリアーは、その場で止まり、ボールを持たまま軽く蹴ってからプレーを再開する。(パスかラン)

何回タッチしたらターンオーバー(DF側がボールを得ること)という数を決めておく。

また、ノックオン(ボールを前に落とすこと)やスローフォワード(ボールを自分より前に投げること)などの反則をしてもターンオーバーとなる。

DF側はタッチして止まったボールキャリアーよりも前にでてはいけない。(その線をオフサイドラインという)

相手がボールを蹴り、プレーを再開したときにオフサイドラインは解消され、DFは再び前にでてよい。

アタック側(ボールを持っている側)は相手のゴールラインの奥バックフィールドにボールをつけたらトライ。点が入る。

アタック側もDF側もコミュニケーションを取り合い、工夫すれば、いろんなプレーができる。

そこが面白いところであり、タッチフットは無限の可能性を秘めた遊びなのだ。(ちょっと大げさ)

「
」
というわけだ。

じゃあ2チームに分けてやるぞー」

僕とけんたは新井さんと同じチームになった。

「じゃあ俺らがマイボ（アタック）からな。」

「えー、ジャンケンで決めましょうよー」

2年生らしき部員が愚痴をいう。

「やかましい。俺はアタックがしたいんだ」

「うわーなんて自己チューな」

「いくぞ 篠原」

「無視!？」

……初めてやる「タッチフット」に僕は少し、いや、かなりワクワクしていた。

何故かわからない。

僕は体育の時間には感じない、「スポーツに対する欲求」のようなものがあるだろうか。

今日しかない一度だけの体験だから、「純粹に楽しもう、」と思った。

6：初めてのラグビー（後書き）

ラグビーの説明や描写はめんどくなら飛ばして読んでください。

さて、初めて運動部の中に入ってスポーツをするはるかに、どんな変化があるのでしょうか。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4878i/>

ワンフォアオール・オールフォアワン

2010年10月9日01時58分発行